

「病気の疑いがある」と、どうやって見つけるのか」

「第六感といふこともある」そんなやりとりに場が和む。8日夜、県立東金病院で、

同病院の吉川雄一郎医師が住民11人とテーブルを囲み、「便が変だったら」をテーマに意見を交わした。病院とNPO法人「地域医療を育てる会」

(会員数33人)が2007年4月から、後期研修医を対象に共同で実施する「レジデント研修」の一コマだ。

この研修は、食事や健康などをテーマに研修医が講話を行い、病予予防や健康管理に関する理解を深めてもらう一方、住民は内容が分かりやすかったかを評価し、「コミュニケーション」スキルの向上を支援する。双方にメリットのある取り組みだ。

今年度は3人の後期研修医

NPO

医師・住民の相互理解促進

が、月1回の割合で毎回1時間以上、診療時の「医者と患者」という立場を離れ、互いの生の声に触れることになる。同病院地域医療連携室の古垣齊拡室長は「若い医師にとって住民のサポートは励みになる」と効果を強調する。



育てる会は05年4月、東金市に住む現理事長の藤本晴枝さん(44)の呼びかけで発足した。自ら高熱の娘を車で千葉市の病院に運ぶなど、この地域の医療体制に危機感を持っていたが、「要望や苦情を言うだけの住民と、情報をきかんと出さない医療、行政側の

の協力も得てほぼ毎月2万枚配布され、これまでに40号を数える。東金病院の夜間救急をルポした昨年第35号では、36時間連続勤務で疲弊する医師や、押し寄せる患者に対応しきれない実態を目の当たりにし、「コンビニ受診は何とにしても避けたい」と結んだ。

活動報告で藤本さんは、コンビニ受診がいかに医師を疲弊させるかを知ってもらったため、自主制作した絵本「くまさんせいのSOS」を紹介した。昨年10月の発売以来、5000部を超える人気となり、宮崎県延岡市の市民ボランティアは、絵本を基に芝居を作り、上演して啓発活動に生かしている。自治医大の梶井英治・地域医療学センター長は「育てる会の活動は、周囲に

関係に、強い不安を感じた」と話す。

この時の取材をした大網白里町の会社役員大野英雄さん(60)は、「頭が痛くて苦しうな顔をした人が、いつまでも診てもらえない。医師や看護師は手いっぱい、どうすることもできなかった。医師の大変さが現場を見て初めて実感できた」と振り返る。

少しづつ語りかけながら、理解の輪を広げていくところがすばらしい」と語る。

「自分たちに何ができるか」を考え、対話の場づくりと情報発信を活動の柱にした。対話は、レジデント研修や医療、行政関係者らを招いての講演会、学習会など。情報発信の中心は、情報誌「CLOSE R(クローバー)」の発行だ。クローバーは東金市全域と周辺市町の一部に、各区長ら

4、5の両日、地域医療を支える全国の住民団体が交流を深めるため、自治医大関連の財団法人が主催したシンポジウムが、東京都内で開かれた。

「医療者が地域と共に生きる。それが医療再生の原点」東金病院の平井愛山院長は、育てる会との二人三脚をこのように語る。地域医療の充実には不可欠な医師と住民の相互理解。その懸け橋となる取り組みは、ゆっくりと、だが確実に実を結び始めている。(この連載は、赤津良太が担当しました)



吉川医師(右端)を囲み住民が意見交換するレジデント研修(県立東金病院で)